

南の島の子どもたち(6)

ユタ的なこと

沖縄では、衰えつつあるとはいえ、今でも庶民の暮らしの中にユタ（民間巫女）が位置づいている。特に精神障害が生じた場合、障害者の家族の約8割が、患者を病院に連れて来るまでには、ユタを経ると言う。靈感を求めすぎて精神障害に陥る場合もある。

主婦達と夜、ひざを突き合せての対話の中にも、新年になると、運勢をみてもらいにユタを訪ねているという事を聞かされてびっくりすることもある。まさに「男の女郎買いと女のユタ買いと癒らない」（沖縄の諺）らしい。あるいは、死者の一周忌には、ユタを招ぎ、ユタの口を通して、死者の思いを聞くのも慣習である。子ども

ものことで心配があるとユタのところに相談に行くことは勿論である。

浅野 恵美子

私自身も、沖縄の宮古島で生まれ育ったので、ユタとは関係なく暮らしてはいてもユタ的なことは体にしみついているのではないかと思う。又、母がユタと共に生きた世代であったこと、ユタに頼りつつ、日々の暮らしに祈りを持って私たち兄弟姉妹を育ててくれたことが、今では大切な思い出となっている。ユタ問題は、沖縄の文化を考える場合、避けて通れない課題なのだろうと思う。

最終回である今回は、私の体験をも交えて、ユタ的な

この意味と課題について考えてみたいと思う。

タマシイが落ちた

私の母は、その世代の多くの母親がそうであったように、家族が病気になったり、うまく事が運ばない場合等に、ユタ（宮古ではカンカカリヤと呼ぶ）をしばしば買っていた。私が小学低学年の頃、私は病弱な子であったが、体がだるくなって元気を無くしていた。母はユタの家に相談に行き、「あなたの娘は、何かにびっくりして魂を落している」と言われた。そこで、母はさっそく、その道の専門のユタ（おばあさん）を招きウグワン（御

願、拝み）をしてくれた。

そのおばあさんは、我が家の何か所かで、線香を燃やして、方言でのたくさんの心を込めての祈り言葉を唱えた。言葉に心を込めていたのが印象的である。おばあさんが、家の入り口で祈っている時、母が私を呼んだ。私が近づくと、母は、玄関先の道路の小石を拾い、用意しであった私の服にくるんで私に渡した。私は、何も考えることなくそれを受け取っただけである。ところが、大変不思議なことに、その日を境に、私は元気になったのであった。

この出来事は私にとって驚きであったが、沖縄では珍



しいことではなかったようだ。びっくりしてタマシイを落とすとのユタのお告げもしばしばなされるお告げであり珍しいことでもなかったのだ。

友人のKさんも私と似た体験の持主である。別の島で育った彼女の場合、やはり、元気をなくしている時、親戚の霊感のある人物が、誰かがタマシイを落していると感じて、誰か元気がない者はいないかと捜しに来たそうである。そして、Kさんをみつけ、ウグワンをしてくれたということがある。Kさんの場合、茶碗に水を入れ、その中に石を三個入れ、その水にその人の手を浸けて、Kさんのこめかみにつけてくれたようだ。そして、Kさんもすっかり元気になったそうである。

母は、私が木のほり遊びをしていて木から落ちた時にも、落ちた場所まで出掛けて、今度は専門のユタに頼むことなく、自分で線香を焚いてウグワンをしてくれた。そして、やはり石を拾ってくれたのだった。

私は、ユタ買いに行ったことはないし、その場面を見たこともないが、幼い私にとって、母が私の為にユタを

買っていることを知ることは、快いものであった。何かの大きい力から見守られているという安心感にも通じていた。自分が特別な意味のある存在であるという思いも育てたと思う。私の為の特別なウグワンは、側で見ているだけであったとはいえ、幼い心に響き、その気にさせたのではないかと思う。幼い心が暗示されやすい性質を持つていた為でもあるだろう。しかし、大人の場合でも同じようなことで良くなったという報告がある。

石はタマシイ?…神?

「花を知るには花になれ」とは禅の教えである。対象を深くみつめ、対象に没入できた時に対象が理解されてくるということであろうか。それができるのが子どもたちである。彼らは、遊びでいきいきと花を演じることができる。花にも心があると信じ、花のイメージの世界に飛び込み、花になりきってしまう。

ユタもそのような心を持っているのだろうか。実際、草や木の言葉が聞けるといふユタ的人物がいる。

そんなことと関係させて研究した訳ではないが、私は空想で花になったり、木になったり、石になったりする人間の心にどんなイメージが生じるのか研究したことがある。

目をつぶり、自分で好きな花や木の石のイメージをえがき、それに応じるようにして体を使い、じっと三分間空想するというやり方である。たくさんの方々には体験してもらったそのイメージには個別差異的なバラエティがあったが、一般共通性として、花がやさしさ、木がさすがしき、石が強さや不変を引き出した。

特に石を演ずると、体はかたくなり、心が強くなり、同時に頑固、孤独になるが、神のような気になるというイメージにまで繋がったのである。どうして、タマシイが落ちた時に花ではなく石を捨てるのか。それは、この石の心（イメージ）にあったのではないか。ユタ的なふるまいには、人間の共通のイメージが活用されているのである。私にとって驚きであるのは、沖縄では石を神々のシンボル視する風があるということである。

又、夢分析では、石は「内面的な世界の不毛さ」を現す象徴言語だという。それは、石のマイナス面である頑固、孤独の一方的な説明であるように思われる。

ユタの功罪

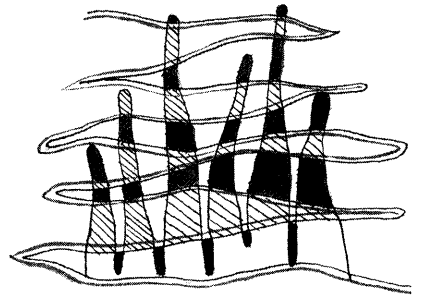
ユタは、古代的、無意識的な智慧を活用している部分があることは、否めないだろうと思うが、ユタ問題は、根が深く必ずしも肯定できることはかりではない。その為、ユタの存在をどう受け止めるかをめぐっては賛成と反対があって揺れているのが現状であり、否定的な方に大方は傾いている。

沖縄のユタをめぐるなまなましい驚くべき実態については、友寄隆静著「なぜユタを信じるか―その実証的研究―」（月刊沖縄社一九八一年）に詳しい。彼は、たくさんユタと直接インタビューしている。又、ユタを買った人びとの体験記、ユタ肯定の意見、否定の意見、ユタについての意識調査等広く紹介している。

この報告を読むと、ユタの持つ超能力というものが実

在することは否定できない。しかし、靈感があるから即その人が幸福になれるとはかぎらない。

「彼（ユタ）は何はともあれ、情け深い人のように思われた。額にきざみこまれたシワの深さは、苦悩の深さと共に、情け深さに通ずるものと思われるほど印象深いものであった。生活史の側面に目を転ずれば、夫や子どもと若い時に死別した者、子供ができなかったため離婚させられた者、未婚の母、頭痛や吐血の苦しみに悩んだ者、事業に失敗しノイローゼ気味となった者、など……（中略）……友は去り、慰めを与える人は絶え、希望が



失せた時、一木一草、路傍の石までが声なき声を放って近づいて来た。昼は病に悩まされ、夜は悪夢にうなされる彼らの内部に、白装束の女や、白髪の老人、侍等が現れるようになり、彼らは先祖の神と名のる霊に心身をゆだね、神の使いとしての使命を自覚する。しかし自らを振り返る時、喜びを伴い自発性を持つ仕事というよりは、一方的な先祖の神の強制に、やむなく従うという事実を認めないわけにはいかない。憂いの日々を歩んできた彼らが、勢い記憶力に富み、ヒステリックな一面が強いことは了解できることである。いたずらに超能力にあ

こがれる人は、彼らの苦しみの深さを知らない人である。」と「ユタと対話して学んだこと」の中で友寄は述べている。

彼は又、思想や信仰がないことがユタの共通点だとも述べている。思想性のないユタが、低い霊のいいなりになって人々を指導する場合、ユタを買う人が混乱させられることがしばしば起きているという。信じられないことなのだが、ユタ買いで財産をつぶしたという例は、最近でもきこえてくるのである。

私の学生に、幽霊を見るといふユタ的人物を恋人に持っている人がいた。友人たちは、その男が若くして彼女の他に女をつくるなど信用できない男であることを知っていた。何とか別れさせようとしたができていなかった。彼は、別れようとする彼女に自殺をと言って威し、実際に手首を切ったりする人物であった。こんなふうに靈感のある人物は必ず良い人ではないのである。

霊というものが存在するとしても、正しい霊であるかどうかが重要である。ましてや、特定の霊が、ある人の

人生を利用するということは、人権侵害ではないか。霊というものは、どういう考え方で人にとりつくのか。先著を読んでいると抗議したい気持ちにもなった。とりつく霊ととりつかれる人との関係が気になるのである。

ともあれ、ユタが存在することは庶民のニーズがあるからでもある。それならば、庶民もユタもより賢くなること、自らの宗教性、思想性を高めていくしかない。

ユタからの手紙

私は、ユタとは関係ない暮らしをしていると思っていたのだが、これを書いていると、ユタの方が私に関係してくれただけがあったことが思い起こされてきた。

実は、私は、今から13年前に息子を亡くした。息子は、小児白血病となって、約10か月の闘病の末、三歳の誕生日を前に他界したのであった。初めての子で、生まれた時から育児記録をつけていたので、闘病中も記録は続いていた。その記録を活かし、お世話になった方々に香典返しをするという意味を含めて、「裕樹は生きてい

る「小児白血病の親と子の記録」を夫と共に出版、配布したのであった。その記録は、多くの方々に読まれ励ましをいただき感謝であった。その記録が見知らぬユタの方の目に止まったのである。その方は、名前を告げず、ユタの立場から本の中にたくさんコメントを書き込み、郵送してきたのだった。私は、当時、そのコメントとともに会おう勇氣がなく、読みはしたものの恐くて仏壇の奥深くに隠したままになっていたのである。

「表紙の裕樹君と向かい合っていると目頭があつくなり、最初の程は表紙を開くこともできずにおりましたが、勇氣を出して拜見致して居りますと、私なりに何かお役に立てればと記録をおつてみえない世界の立場から筆を入れさせてもらいました。果して御参考になるかどうかわかりませんが、私自身、頭の中から足先までガンと宣告されましたが、おかげさまで現在はすぐわれまして神の使命者（うちみき）として頑張っております故に慈愛の御目をもってごらん下さればしあわせに存じます。

神示によれば、世の中の不幸は、総て霊作用によるも

のだとおっしゃるのです。ですから、其の霊をなくさめ成仏させてやれば、皆な幸福になるということです。成仏させるには、私共が此の世に生まれてこの方、お世話になった火風水神（みふしがなし）を全部、日神自身（まうがん）を中心に和合せ、それが自分自身や各家庭、各字や村、各国のまもり神になるということです。」

こんなふうにしてそのユタの方は、書き出している。たくさんコメントがあるのであるが、例えば、病院の近くを車で走っていて今度は間違ひなく妊娠らしいと夫に報告して喜び合っているあたりに対しては、「こんな素晴らしいお話は自宅ですればよかった。病院に溜っている霊がうらやましがって奥さんのおなかに入ってきて、出産の苦しみを与えた」としている。あるいは、夫婦喧嘩のところでは、「白血病という形でゆうき君に霊がかかって成仏させてくれと頼んでいるのに御両親に靈感がないために気がつかないで、その霊がゆうき君から離れて一時的に夫婦喧嘩させたり、離婚問題に発展させたりしていた」というような内容である。

そのユタは、お祈りの仕方についてもたくさん書いてくれた。このユタの方が、見知らぬ私たちに自分なりの愛を向けて下さったことを私はありがたいと思う。他人のことを自分のことのように感じてくれる心があった。この暖かさがユタの魅力なのである。

この事実を思うとユタ問題は、観念的に取り扱っても仕方ないと思う。少なくとも一人ひとりが幸せになるためにさまざまな試みがなされているということだ。そして、間違いもあるということであろう。

科学の発展、生活の近代化の中で、ユタの介入する子育ての慣習はなくなりつつある。しかし、古き良きもの||情は失いたくないものだ。

私たちが息子の闘病にあけてくれている頃、宮古の母はユタを買いに行ったそうである。ユタは、「あの二人は神さまを信じていない。神さまを信じないと大変なことになる。」と警告したそうだ。その警告に私は、ウチアタイ（内面に照らしてその通りと思うこと）した。日

々の暮らしに追われて、思想はあっても信仰をもたず、知に走って情を失いそうになる自分がいるからである。

育児、家庭の平和というものは、日々の祈りを欠いてはうまくいかないこともわかってきた。霊というものは見えはしないが、自他の心のよごれ（不浄な霊？）には良く気づくようになった。母が祈ってくれたように、私も私なりに祈って過ごすようになった。祈りは、正しい目標を与えてくれる。私は、未だ特定の宗教を持たないが祈りを信じる。人の心、思いは伝わり、広がるものだ。そして、心の浄化こそが平和を作り出すのではないか。

ユタには、たくさんの不安要素もつきまといているが平和を願い、育てる方向で行動できるのであれば、彼らと仲間になれるのだと思う。

（沖繩キリスト教短期大学）